

四 曠野の菩薩

本年になつてから、三月には久米支部の創立十五周年記念講習会、三月末から四月初にかけて本団の三十周年、それから井野支部の十五周年、五月に入つて加計支部の二十五年をすませて、月末には福山支部の二十五周年を迎えんとしている。今更に年月のたつことの速きに驚きつつ、又これらの地方の同胞の深い因縁を感謝することである。

二十年三十年と一緒にいたからとて、それだけで因縁を喜ぶことは出来ない。如来の大慈悲によつて結ばれたのでなければ、因縁を喜ぶことは出来ない。願力自然の世界は誠に希有最勝の因縁果が、如来によつて成就される世界である。因縁を悲しみ因縁を悪み、因縁を呪うて因縁を喜ぶことが出来ない場合は、誠に無明流転の因縁、惑業苦のもつれ合ひ、自損損他の悪因縁である。「有難うございました」と涙の中に今日あることの因縁を喜ぶ記念聖会の有難さがそこにある。

信心の智慧は因縁に向つて開かれる心の眼である。

信心の前には一切の因縁が浄化せられることを知る。夫婦の因縁は愛慾から始まるが、お念仏の夫婦は聖なるものによつて結ばれる。生きぬ仲の母子も、はじめいがみ合つていても、念仏によつてとければ真の母子以上となる。

たとえ、釈迦親鸞と共に暮そうとも、正法以外のものを求める提婆であるならば、彼は因縁を忌み反逆して因縁を喜ばぬであろう。恐るべきは自力であり我執であり、名利心である。

記念式典に列する度に今更に「念願は人格を決定す、継続は力なり。」を思う。

真実一道の継続のみが真実の歴史を作る。

真実の歴史とは、その中に尊い生命が流れており、その歴史の中から更に尊いことが生れて来、尊い人が生れて来るに至ることである。

支部二十五年の歴史は、本団三十年の歴史と一体であり、本団三十年の歴史は、真宗七百年の歴史をその体とし、真宗七百年の歴史は、仏教二千五百年の歴史と一体であり、仏教二千五百年の歴史は、法界悠久の歴史と一体であらわばならぬ。この真実歴史は唯南無阿弥陀仏の歴史である。かくの如く、汝が歴史的仏事の莊嚴者であるか否かは、唯その信の純不純によつて決定する。純粹無雑なる信はそれ自体、無量寿の御いのちの等流である。

個々の人ほこの御いのちのみ光の中に生かされて、個人の歴史が悠久の歴史と合致する。

正法に信順して、専復専、より純粹により純粹にの論拠がこゝにある。

新しく真実の歴史の中に入らんとするものは、必ず頭を下げねば入ることが出来ない。自己を内転して二種深信を獲得してのみ、はじめて大行界裡の正定聚の人となる。

真実のみが末通る——とは、念仏のみが末通るということである。

しかし人間の目にはなかなか真実だけでは通られぬように思われる。そこで妥協したり、まがつたり、捨てたりして道をすてる。唯念仏道のみは仏力に住持せらるるが故に、真実信心の人は一貫する。真実一道を捨てて安易につけば、更に困難な有礙の世界が待っている。念仏道は易行道であり、真に無礙道である。

雨の日も風の日も八万四千の難行をすてて、本仏招喚のまにまに念仏一道にあれ。世の俗難恐るるなかれ。名利を追うなかれ。直ちに願往生の一道をたじろがざれ。たとえ三千大千世界に火の雨降るとも、恒沙の護念証誠は念仏行者にあるであろう。

真の菩薩大士は曠野にある。悲しい哉イソテリ、如来本願の血潮も、唯一片の知識となつて頭脳の中に蓄積される。彼の野の中に咲く希有華を見よ。顔の細胞の一つ一つが泣き、毛孔の一つ一つが喜びに溢れているではないか。教育家とは、実にこの尊き華を拝む巡礼者でなければならぬ。外に尊きものを拝む心は、内に開いた信心である。内にあつては十八願、外にあつては十七願、十七願なくして十八願なく、十八願なくして十七願はない。二願不離不二は今家の中心論題であり、行信不離は安心の根本問題である。

人生曠野に大行の華を拝む。これに過ぎたる喜びはない

親鸞聖人は一切の殻を破つて自由の虚空界に出られた。学問するものは何時しかに傲慢の殻の中に入る。しかし失望するなかれ、一文不知の最勝人に同ずる道あり。日く、全我をあげて教法を受取れ。必ず仏の智慧力、大悲力はこの私の城を粉碎して下さるであろう。学問を捨て、大愚大悪にさめる時、はじめて学問が生きるであろう。イソテリは曠野の菩薩を拝まねばならない。